

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

書評：岡恵介著『見えざる森の暮らし：
北上山地・村の民俗生態史』

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4587

岡恵介著
『見えざる森の暮らし——北上山地・村
の民俗生態史』

東京，大河書房，2008年
220頁，3,200円（+税）

池谷 和信*

近年、英語圏の文化人類学では、日本の山村が注目されている。そこでは、住民による山の神信仰をめぐる問題や [SCOTT 2007; KNIGHT 2008]、サルやクマなどの野生動物と人々との多面的なかかわり方などが扱われている [KNIGHT 2006]。しかし、国内に眼を向けてみると、限界集落として山村がメディアに取り上げられることはあっても、日本民俗の原像を求めて文化の過去を再構成する研究も少なくなり、山村研究は必ずしも活発ではない。

本書は、日本の山村を対象にして、次のような問題意識で書かれている。山村は、昔から一貫して平地農村や都市に比べて劣った、消滅が自明とされるような地域であったのであろうか (p.13)。山村で開発してきた技能や社会システムは、消え去るままに捨て去ってよいのであろうか (p.13)。読者は、本書を一読することで、日本の山村に刻まれた歴史

* 国立民族学博物館

の深さや現在かかえる問題を理解し、現代文明のなかで山村を研究する意義について考えさせられるであろう。そして、山村文化を理解するためには、古い文化が残されているという伝統主義的な見方ではなく、商品経済化にともない地頭名子制度（ダンナシステム）のような社会制度が形成されてきたなど、修正主義的な見方より重要性を教えてくれる。

さて本書は、著者が2006年に筑波大学に提出した学位論文を改稿したものであり、序章と6つの章から構成される。以下、各章の内容をまとめた後にコメントを述べる。

「序章 民俗生態史の視点から」では、本書の目的、方法、研究枠組みに使われる生態史の有効性について述べる。本書は、北上山地の山村の過去150年の生業の変遷と森林との関係性、山村社会における森林利用のエスノ・サイエンスや生存戦略などを明らかにすることがねらいである（p.13）。筆者は、1982年以来、北上山地の山村・岩手県岩泉町の安家（あつか）地区において、主に生業を対象にした生態人類学的な調査をしてきた。具体的には、山村における「自然知の体系」の実態を、それを背景とした民俗社会と自然との交渉の関係性として捉え、通時的な側面に重点を置く生態史の視点から記述・分析をすることである（p.17）。

「Ⅰ山村・安家の地域特性」では、調査地の岩泉町安家地区の自然的環境、社会・歴史的環境の概観が紹介される。ここでは、この地域が古くからヤマセによる凶作が頻繁に生じる地域であり、凶作に強いといわれるヒエを栽培して雑穀を主食としてきた点、国有林が卓越する山村であること、かつて地頭名子制度が存在していたことが述べられる。

「Ⅱ描かれた昭和の北上山地」では、1937～2005年の間に新聞や書物のなかで「チベット」と形容された言説を約100ヵ所以上取り上げ、安家地区を含む北上山地に暮らす人々が、日本のなかでどのようにみられてきたのか、そのまなざしを記述する。「岩手のチベット」という言説は、その地理的な隔絶性などから1937（昭和12）年に初めて用いられ、戦後は書物「ものいわぬ農民」をはじめとして、メディアをとおして「日本のチベット」として全国に知られるようになったという。

「Ⅲ重層的な森林の利用と山村の暮らし」では、山村における森林利用の実態を商品生産と生活（自

給）に分けて記述する。前者では、養蚕、狩猟、鉄山経営、牛飼養、枕木生産、木炭生産、パルプ・用材生産という7項目の生業内容を、それぞれ詳細に紹介する。まず、養蚕は森林のヤマグワの葉を飼料として利用していた可能性があり、狩猟ではツキノワグマを仕留めたときにクマオクリの儀礼が近年まで伝承されていたという（p.78）。また、近年のムササビの減少などは森林伐採が関与するという。

その一方で鉄山ではミズナラやコナラを焼いた炭が使われ、その年間の伐採量が計算されている。鉄山経営の盛んな時代には、1日当たりの調査地域の木材伐採量は大型トラックで2.4台分に相当するというには驚かされる。牛飼養では、夏にのみ森林を利用する夏山冬里方式が紹介される。ここでは、1975年に牧草が播種される前にはすべての牛の飼料は天然の野草であったという。枕木生産では川の流れを利用して用材が運ばれ、木炭生産では、それに最適といわれるミズナラやコナラの木が利用されてきた（p.90）。パルプ・用材生産では、森林の伐採が行われ、その後造林事業として、その担い手が国有林材生産協同組合に再編された。

「Ⅳ生業史からみた社会変容のダイナミズム」では、藩政時代から現在までの生業の変遷を、7つの時期に分けて述べる。その詳細は省略するが、それらの時期は「鉄山隆盛期」、「牛飼養・養蚕：畑作期」、「ダンナシステム確立期」、「炭焼勃興・戦時統制期」、「炭焼隆盛・衰退期」、「多生業分散期」、「土木作業・多生業化・年金期」と名付けている。

「Ⅴ安家の生存戦略とその成立条件」では、安家地区内の2つの集落を取り上げ、そこでの春、夏、冬の食用植物の利用が詳細に述べている。とりわけ、救荒食としてコナラやミズナラの実である「シダミ」の加工技術や栄養量などが数値とともに記述し、補助耕地としての焼畑地についても言及する。

「Ⅵ北上山地山村・150年の意味」では、北上山地山村における森林利用の変遷をまとめている。鉄山経営、牛飼養、枕木生産、製炭、パルプ・用材生産、堅果類採集、燃料というこれら7項目の利用形態別に、森林からの年間伐採量や年間採集量を計算すると同時に、上述した7つの時期に対応させて、自給労働、換金労働、賃労働という3つのカテゴリーに分けて生業の変遷が簡潔に描かれている（p.172）。

以上のように、本書は、ミズナラ、コナラ、クリ

などのかかわりが不可欠である北上山地山村の生存戦略が述べられており、食用と生活用材に分けて森林の多様な利用法を詳細に記述した点、自家燃料のための伐採量など森林に対する人為作用の影響を定量化した点、過去100年間における生業の変遷を丹念に追跡した点などにおいて、優れた内容を含むモノグラフである。しかし、以下の3点に焦点を当てて疑問点を指摘しておきたい。

第一は、調査地の単位の設定に関する疑問である。本書の多くの部分では、岩手県岩泉町安家地区(地区内には、10以上の集落を含む)として議論が進められた。このことで統計資料や既存文献を引用することが容易になるという長所もあるが、筆者が最も長く滞在していたという同地区大坂本の事例に多くの頁をさいて述べられているわけではない。このため、生業の変化の議論が荒くなり、長期間にわたる住み込み調査(1986年からは同地区に居住)のよさが十分に発揮されていないようにも思える。例えば、生業の変遷のまとめの表(p.172)は、安家地区全体で一般化できるものなのか、地区内の中心地(元村)とそれ以外の集落との違いを考慮してまとめられるべきものなのか疑問が残された。また、V章では、安家地区大坂本(p.73、図7の図にはないが)や年々集落を対象にして、「シタミ」(コナラやミズナラの堅果)とクリという堅果類の利用の違いなどの興味深い議論がなされるが、その違いの生まれた背景などの分析をしてほしかった。

第二は、本書のタイトルにみられる森の暮らしに関することである。これまで、農民を対象にした生態人類学では、主にアフリカやニューギニアなどの熱帯地域を主な調査地として、狩猟、採集、焼畑などの自然に依存した生業活動から森と人とのかかわりあいを把握してきた。これに対して本書は、ミズナラやナラが卓越する落葉樹林の森に囲まれた暮らしを示した点でユニークな資料を提供しているのみならず、多様な生業のなかにウシやカイコなどの家畜飼育を加えている点、山地農民の生業を複合的にとらえている点が特徴的である。なかでも、夏は野外で冬は舎飼いに変わるウシ飼養の実態と、餌となる野草量とのかかわり方は興味深い。筆者の計算によると、1969年頃に安家地区で約440頭のウシが飼われ、地区全体で年間約880トンの山野草が採集されていたという(p.87)。この点で、ウシ中心の地

域生態系(p.88、図12)が、持続的であるのか否かなどを検討することも今後は必要になるであろう。現在、安家地区では家畜市場が閉鎖をされてウシ飼養頭数が急激に減少しているが(p.120)、ウシ中心の生態系が崩壊する過渡期を示しているのかもしれない。

それに加えて、森と人とのかかわり方の歴史変化に注目して、森をめぐる生活のための資源利用と商品生産のための資源利用という2つの森林利用のあり方が述べられるが、両者のかかわり方をデータで具体的に示してほしかった。例えば、商業的な炭焼きの時代に、野生植物の利用は維持されていたのか否か、両者の有機的関係については十分に言及されていない。本書では、2つのタイプの資源利用が常に併存しているようにみえるが、世帯別や集落別にまとめてみると、その組み合わせ方は多様であるようにみえる。

第三は、本書の基本視角になっている民俗生態学というアプローチと既存のものとの違いがよく理解できない点である。これまで、生態人類学では、文化生態学、政治生態学、歴史生態学などを3つの生態学と呼ばれてきたが、本書は自然と人とのかかわりあいの歴史が内容の軸になっている点では歴史生態学に近い。しかし、本書では人為的作用する植生の変遷という視点からの把握はみられない。その一方で、森に依存する生業のみならず地頭名子制度という社会階層も視野に入れて複雑系の山村社会を把握している点では、これまでの生業に焦点がおかれる文化生態学とは異なる新たな枠組みを提示する。つまり、本書は日本やヨーロッパの村落社会のように文字資料を使って歴史復元が可能な社会だからこそできるアプローチを有効に利用しており、世界の山地農民の生態史を考える際の一つの事例を提供している。この点では、チベット系シェルパが暮らすネパールのクンプ地区(複数の村をかかえる)を対象にした生態史研究[STEVENS 1993]と本書との比較によって、多様な生業複合とその変遷史に関する共通のプロセスを抽出することができるであろう。

本書は、冒頭で述べた、近年の英語圏における日本の山村研究と比べてユニークな位置を占めている。暮らしを示すエコシステムの要素は多様であるので、それらを細部にわたり記述することは難しい。しかし、山の神信仰(p.110)や人と動物との

かかわり方 (p.79) なども暮らしのシステムに盛り込むことで、森の暮らしの全体像がより鮮明に見えたかもしれない。最後に、本書の28頁には、安家地区の人口変動のグラフがある。1878年の人口では1000人を下回っていたものが1960年に2500人とピークとなり、その後減少して2005年の人口は1878年のそれに近づいている。これは、何を意味するのか。近年の人口減少を単に過疎化とみるか、山村本来が維持できる適正な数にもどったとみるかは論議になるだろう。本書は、北上山地の安家地区のモデルを通して、100年以上の時間幅で山村を捉えることがいかに重要なことであり、近代化の影響を受けて山村社会はいかなる変化を経験してきたのかを教えてください。

参考文献

KNIGHT C.

2008 The moon bear as a symbol of Yama: its significance in the folklore of upland hunting in Japan. *Asian Ethnology* 67 (1): 79-101.

KNIGHT J.

2006 *Waiting for Wolves in Japan: Anthropological Study of People-Wildlife Relations*. University of Hawai'i Press.

SCOTT S.

2007 Are mountain gods vindictive? Competing images of the Japanese alpine landscape. *Journal of the Royal Anthropological Institute* (N.S.) 13: 863-880

STEVENS, S. F.

1993 *Claiming the High Ground: Sherpas, Subsistence, and Environmental Change in the Highest Himalaya*. University of California Press.